北小学校通信　６号　　Ｒ６.６.２５

北小 赤石

学校のめあて

心豊かで
たくましく
いつも進んで学ぶ子

TEL 25-4450　http:// www.isesaki-school.ed.jp/kitasyo/

授業参観ご苦労様でした

１１日(火)～１３（水）の三日間で２学年ずつ授業参観を実施しました。平日というご多用な時間にもかかわらず、どの学級にもたくさんの保護者の方々にご来校いただきありがとうございました。新学期から２ヶ月半ほどの間に様々な面で成長したお子さんの姿を感じていただけたでしょうか。各学年とも話をしっかり聞いたり、先生の問いかけに元気に答えたりする子どもたちの頑張っている姿を感じていただけたら幸いです。

いじめ撲滅スローガンをつくりました

北小では６月をいじめ防止強化月間として、各学級でいじめ防止に向けたスローガンを考え、考えたものを児童玄関に掲示していじめ防止の啓発をしています。また、道徳や学級活動等において、いじめを防ぐために自分たちができることを考える学習などもあわせて行っています。各学級が考えたスローガンを紹介します。

１－１　○クラスのみんなと　ちえをだしあって　力をあわせよう
１－２　○いいところをほめて　みんなのえがおを　たいせつに。
１－３　○きずつけない　みんなのこころをまもるため
２－１　○いじめ、ダメ！　みんななかよし　やさしいクラス
２－２　○やさしいこころ　気もちをゆたかに　いいクラス
３－１　○自分のことも　相手のことも　優しい気持ちで　大切にしよう
３－２　○やさしい言葉が　あふれる３年２組
３－３　○友だちと仲よくして、言う人も聞く人も　やさしい気持ちを大切にしよう
４－１　○だれにでも やさしく 思いやり 助け合う 一人一人の個性を大切に 笑顔あふれる毎日を
４－２　○助けあう　こまったときにそうだんだ　気持ち思えるいいクラス
５－１　○気づき合おう　楽しいクラス　ニコニコ笑顔
５－２　○明るい言葉をかけあい　笑顔の絶えないクラスでいよう
６－１　○自分の個性と相手の個性　どちらも尊重　明るい未来
６－２　○一人一人の優しさで　個性豊かな三十四人三十四色の　笑顔の花を咲かせよう
青空　　○あいてのきもち　じぶんのきもち　よくきいて　ゆずりあって　なかよくあそぼう
あすなろ○明るいえがおで　こまっている子に　声をかけよう
かがやき○きまずくなっても　やさしさをもって　がんばって、こえをかけよう
ぐみの木○わるぐちを言わず　みんなでなかよく　自分がされたくないことはしない

子育てについて（子育て四訓の紹介）

本通信では家庭教育、とりわけ子育てについて日頃、考えていることを載せたいと思います。子育ての目標は何かと問われれば、究極の目標は「子どもの自立」ではないでしょうか。子どもが自分の力で生活できるようになることが大切で、そのために学校教育も大きく関わっているのだと思います。そして、当然、子どもが親から自立をすることを目指す中で、親も子どもから段階的に離れていかなければならないと思います。いわゆる「子離れ」といわれるもので、親が子離れをしなければ、それは子どもの自立を妨げるものとなるのでしょう。よって、親が子どもとの距離を子どもの成長に合わせて、上手くとっていくことが大切なのだと思います。そこで参考となるものに「子育て四訓」というものがありますので、それを紹介したいと思います。これは、山口県のある教育者が提唱したもので、乳児期、幼児期、少年期、青年期のそれぞれの発達段階で、子どもに対する親の距離感の目安を示したものです。

子育て四訓
- 乳児はしっかり肌を離すな
- 幼児は肌を離せ、手を離すな
- 少年は手を離せ、目を離すな
- 青年は目を離せ、心を離すな

この四訓の最初は、乳児に対する接し方です。乳児は、母親や信頼できる人にだっこされることで安心します。このようにこの時期は肌と肌のふれあいを通して、人への信頼感が育つ時期で、心理学では「愛着形成」の時期ともいわれます。愛着形成は、子どもが望ましい成長をする上で不可欠なものです。

次の幼児期では、歩けるようになり、あちこち一人で歩き回ったり、子ども同士で遊んだりしながら、子どもの世界が少しずつ広がっていきます。ここで大切なのは、信頼できる人が近くで見ているから幼児は好きなように動けるということ、そして、一人で好きなように動くことが幼児の自立の基礎になるということです。

３つ目の少年期は小学生の時期が大きく関わっていて、この時期は子どもの行動範囲が広がり、子どもだけの世界ができ始めます。また、仲の良い友だちができたり、友だちとのトラブルにも自分たちで対処し始めたりするのがこの少年期です。だから、親は、手を離すスタンスで子どもに接することが大切になります。手を離さないでいると、子どもへ過干渉になったり、子どもの自立心の育成を阻んでしまったりということにもつながります。ただ、この少年期は、まだまだ子どもで、行動と考え方に幼い面がありますので、親はしっかり目は離さないことが大切です。よって、子どもの世界を尊重しながら、親子のほどよい距離感を保つことがポイントです。

最後の青年期は、思春期とも重なってきますが、これからの人生の中で大変なことや辛いことが起こっても、それを乗り越えて行くための力を養う時期です。だからこそ、親から見ればまだまだ未熟で心配な子どもからあえて目を離し、子どもの思うように行動させることも大切になってきます。そして子どもを見守りながら、「いつもあなたの味方だ」というメッセージを送り続けることが「心を離すな」と言うことにつながるのだと思います。

この子育て四訓では、乳児から青年になるまでに、肌を離し、手を離し、目を離し、そして最後に心だけがつながっている時に、本当の意味で子どもが自立するのだと思います。

最後に子育ては、自転車の乗り方を教える事と似ていると言われることがあります。子どもの自転車の補助輪を外し、自転車の荷台から親が手を離したとき、子どもはおぼつかないながらも自力で自転車を運転します。そして、何度も転びながら自分一人で自転車を運転する練習を積みながら、運転ができるようになっていきます。このように転んでもまた起き上がって走り出す子どもたちを、私たち大人は寄り添い、そっと手を離して見守っていきたいものです。